

ケインズ、ウィトゲンシュタイン、ムーア

—ケインズ『一般理論』の世界—

東 條 隆 進

1. はじめに
2. Das Maynard Keynes Problem
3. ケインズと後期ウィトゲンシュタイン
4. サンプル (sample) としての理論・モデル
5. ケインズの図式主義 (schematism) の特徴
6. 功利主義批判
7. 結論

1. はじめに

最近 *Keynes's Uncertainty Revolution* という著書と *The Claims of Commonsense — Moore, Wittgenstein, Keynes and the Socialsciences* という著書が発表された。

ケインズ理論と“uncertainty”（不確実性）の関係については今までにも論じられてきた。しかしケインズと“commonsense”（コモンセンス）の関係、ケインズとウィトゲンシュタインとの関係についてはこれから本格的に研究されていくように思われる。

本稿でケインズの思想と「不確実性」および「コモンセンス」の関係について考察するが、主として John Coates の所説を中心にして考察して行きたい。

2. Das Maynard Keynes Problem

*Keynes's Uncertainty Revolution*の著者 Bradley W. Bateman は das Adam Smith problem にもじって das Maynard Keynes problem を提起した。「アダム・スミス問題」とは『道徳感情（情操）論』と『国富論』の思想的関係の「違い」とも見られる点について19世紀末ドイツの経済学者たちがつけたものであった。

「ケインズ問題」とは初期の主要著作である『確率論』と『雇用、利子及び貨幣の一般理論』の関係に付けられた「問題」である。『確率論』の論理と『一般理論』の論理が一致しないのではないかという問題である。『確率論』における“probability”は「客観的」な“probability”である。しかるに『一般理論』において強調されているのは「主観的」な“uncertainty”である。Bateman は客観的 probability から主観的 uncertainty への転換を、1933年から34年にかけてであると見ている。初期のケインズに哲学的に決定的影響を与えていたのはムーアであったが、そのムーアはプラトン主義者であった。ケインズの“probability”もムーア的意味で客観的であった。しかしこの客観主義はラムゼイ (Ramsey) によって繰り返し批判された。ケインズもついにはラムゼイの批判に屈し、主観的 uncertainty 主義者になったと考えられている。しかしこの転換はもっと客観的理由、経済学的理由によったのであるというのが Bateman の意見である ([1] pp. 7~14)。

ケインズは『インドの金融と通貨』の著者として出発し、『貨幣改革論』及び『貨幣論』を発表した。もちろんその間に「平和の経済的帰結」が来る。さらに1926年「自由放任の終焉」を発表して、古典的自由主義からの脱却をはかる。そして「ロイド・ジョージはそれをなし得るか」というパンフレットを発表し、カーン (R. Kahn) とともに公共投

資の経済的効果、雇用創出効果を問題にする。そして「繁栄への道」で「魔術的な公式主義」に入っていく。さらに『貨幣論』がケインズ・サカスで徹底的に検討されることを通して、企業家の confidence 問題が重要になってきたとする。なぜなら企業家の「確信」は心理的なものであり、高度に「主観的」であるからである。

3. ケインズと後期ウィトゲンシュタイン

これに対して、ケインズ理論が取り組んだ「社会」的世界における“vagueness”（不明瞭性）問題と commonsense の関係に焦点を当てたのが John Coates の著書である。Coates もケインズとムーアの関係に注目する。そして後期ケインズに影響を及ぼしたウィトゲンシュタインの影響に注目する。

『論理哲学論考』の前期ウィトゲンシュタインから『哲学探求』の後期ウィトゲンシュタインへ転換する過程で決定的影響をあたえたのがスラッファ (P. Sraffa) であったことはよく知られている。ウィトゲンシュタイン自身がそのことを述べているからである¹⁾。そしてマーシャル経済学に潜む問題点を明らかにしてケンブリッジの経済学に衝撃を与えたこともまたよく知られている²⁾。しかしウィトゲンシュタインがケインズやスラッファに与えた影響についてはいままで知られていなかった。

「社会」というものは数理的厳密性が妥当するような世界でなく vagueness な世界である。この「不明瞭性」をどう論理化するかというときに「コモンセンス」が問題になってくる。ウィトゲンシュタインもまたケインズも「不明瞭性」という世界での「コモンセンス」によるレトリックというものの役割を重視したというのが Coates の考え方である。

したがって客観的な probability から主観的な confidence へと強調点が移行したのは、時間過程としての未来問題だけでなく、社会経済全体を支配する根源的 vagueness との関係からであるということになる。Bateman が強調した企業家による「確信」という心理的要因だけでなく、より一層根本的な社会経済を理解し把握する学問的枠組そのものが『確率論』から『一般理論』へ移行する過程で変わった。未来の uncertainty という時間概念としてだけでなく、空間概念のみならず世界理解としての vagueness 問題との関係からであった。

ウィトゲンシュタインの後期哲学の特徴である「言語ゲーム」として世界をみる立場にとって vagueness と commonsense というものが決定的である。そしてケインズの『一般理論』の論理構成もウィトゲンシュタイン的な意味での「言語ゲーム」の影響を受けているというのが Coates の考えである。ウィトゲンシュタインとケインズはともに概念というものを generalization するものとしてよりも sample の機能として考えた。ケインズは概念というものを存在論的なものとしてよりもプラグマティックなものと考えた。社会科学は普通の議論である概念やイデアル・タイプスと類似の性質をもつモデルを用いるものと考えた。

初期の論理的アトミズムにおける「理想言語」ideal languages の観念を後期ウィトゲンシュタインは vagueness (不明瞭性) というもので克服した。理想言語というものはラッセル (B. Russell) の数理哲学において重要な役割をはたした。ラッセルも初期ウィトゲンシュタインも、概念というものは適切なルールのもとで使用されて初めて正確になるというフレーゲ (G. Frege) の言語理論の前提に立っていた。ウィトゲンシュタインはフレーゲの理論が言語的アトミズムに立っているということを発見したのである。しかし、「ゲーム」の世界においては、それがカード・ゲームであれ、オリンピック・ゲームであれ、どんなゲー

ムであれ、類似点や相似点が複雑にオーバーラップし、交差しながらネットワークを形成しているということを発見した。言語ゲームにおいても、言語使用は family resemblance (家族的類似性) があり cluster theory のように同一言語で様々な使用に役立てるということを発見したのである。初期の言語の単一使用という前提が崩れたのである。言語における「不明瞭性」は言語システムの関係が「一対一」one-one ではなく、「一対多」one-many の関係である。「不明瞭性」vagueness は「あいまいさ」ambiguity とも違う。このような不明瞭な言語ゲームは共通の特性を「一般化」generalizing することはできないのであって、パラダイムのように対象をサンプルとして a sample object を選択するだけである。プロトタイプとよばれるファジイ論理 fuzzy logic である。不明瞭性はコミュニケーションを効果的にする目的がある。こうしてウィトゲンシュタインは初期の『論考』の「正確なルールに従う calculus proceeding」として言語を見なす見方や、不明瞭さをさけるための特殊な言語を発見しようとしたラッセルの理想言語と対立的な立場をとるようになった。

4. サンプル (sample) としての理論・モデル

このようなウィトゲンシュタインの立場がケインズにも受けつがれた。ケインズは「定義」definition というものを「対象 (objects) を共通の特性 (a common property) と同一視させたり、一般化するプロセスと区別し、むしろ多様な諸対象の母集団を一つのサンプルにすべきであるとし、そのような特徴が「社会諸科学における定義やモデルの性質を理解するうえで重要である」と考えるようになった ([4] p. 53)。

Coates は1930年代になってケインズの書いたもののなかにウィトゲンシュタインとおなじ仕方でケインズが概念を使い始めた点を強調した

([4] p. 82)。ケインズが社会科学における「概念の不明瞭さ」に関心をはらったというのである。とくに『一般理論』発表に至る過渡期において重要な意味をもったという。新しい理論と言語の関係が重視された。『一般理論』第二部で「方法と定義の一般的諸問題」が論じられた。それが「定義」についてかなり長いとり扱いをせざるを得なかったのは、全体としての経済システムの問題を適切に扱うために不可欠な「量の単位」the units of quantity の選定と「所得」income の定義なしに『一般理論』を展開することが不可能であったからである。

全体としての「産出量」とか、全体としての「資本設備」とか、「一般物価水準」とかいうのは「不明瞭」な概念である。ここで vagueness というのは「量的でない」non-quantitative ということと同意義である。マーシャル (A. Marshall) やピグー (Pigou) が使用した「国民分配分」は社会の「実質所得」を合計したもの（貨幣所得でない）を含むが、それは数量的な科学を立てるために求められる実質的な量というものに基礎を置いている。このような概念は同質でなく、しかも測定することができない財やサービスでなりたつ「社会的産出物」という概念的怪物 chimera に根拠をおいている。

ケインズが使用した「基本単位」である「貨幣価値の量」と「雇用量」は「同質」homogeneous の概念でなり立っている。だから明確な測定が可能なのである。したがって不明瞭さというのは測定する units に関係するよりも、定義に関係するものである。有用な用語を選ぶことが困難である。経済学においてどれくらい正確な定義が必要とされるかということもまた重要である。経済学のような学問においては余りに precise な定義は役に立たないのである。経済学を展開することは数学的論理を展開することでもなければ、法律のドキュメントを記述することでもない ([4] p. 89)。

さらに vagueness は「期待」expectation にも関係する。ケインズは “the fragility of expectation” という用語を用いた。“future” というものは “fluctuating, vague and uncertain” である ([4] p. 84)。「われわれの既存の知識は期待を数学的に計算するに十分なほどの基礎を提供するものではない。」([4] p. 84)。

5. ケインズの図式主義 (schematism) の特徴

経済時間と経済空間がともに vagueness であり、その記述のための理論がサンプルとしての性格と、定義可能性に依存していると考えるケインズは、その記述可能な基盤を日常的言語使用と常識に求めた。commonsense とこの世界の common usage が頼りであった。『貨幣論』とちがって『一般理論』においては「貯蓄」や「投資」という専門的経済用語も日常的経済活動に沿うように定義されたのである。とくに「生産期間」period of production や「使用者費用」user cost という用語は「事業家の意見」opinion of businessmen にしたがって構成されたのである。企業家は animal spirit に従って事業を遂行する。uncertainty な事業世界で市場 market sentiment や市場での投資に影響を及ぼし続けるのである。

事業家の意見というものは不明瞭であり、かつ非合理的なものである。この不明瞭な常識的意見をいかに扱い易くする manageable なものにするかが理論の役目である。ケインズにとってのモデルは思考の道具としての有用さ usefulness を引き出すためのものである。経済学者にとってモデルを用いて考える技量 art が重要である。ケインズにとっての「理論」や「モデル」は Coates に従えばウェーバー (M. Weber) 的意味で「イデアアルティプス」idealtypus である ([4] p. 110)。

ケインズにとって経済学さらに社会科学は自然科学ではなく道徳科学 moral science であった ([4] p. 102)。そして論理学の分野に属するものであり、倫理学を含むものであった ([4] p. 118)。社会科学は経済学も含めて「価値判断」をさけることはできないのである。ケインズは「記号主義的方法」symbolic methodによって「一般化」generalizationしようとする行き方を「えせ自然科学主義」pseudo-natural-scienceと批判した ([4] p. 111)。おなじく数理経済学や計量経済学的手法を「えせ数学的方法」symbolic pseudo-mathematical methodと批判した。

『一般理論』第21章「物価の理論」におけるケインズの数理経済学批判はこのような文脈で理解されるべきものである。

「われわれの分析の目的は、間違いのない答えを出してくれる機械、あるいは盲目的操作の方法を提供することではなく、個々の問題を考察するための組織化された秩序立った方法を用意することであって、錯綜要因を順次に遊離化することによって一応の結論に到達した後は、われわれは改めて熟慮をめぐらし、できるかぎりよく要因間の相互作用の可能性を考慮しなければならない。これが経済学的思考の性質である。われわれの形式的思考原理（しかし、これなしには、われわれは森の中で道に迷ってしまうであろう）をこれ以外の方法によって適用するやり方は、われわれを誤謬へみちびくであろう。本章の第六節で述べるような、経済分析の体系を形式化する記号的、疑似数学的方法の大きな欠点は、それが問題となっている要因間の厳密な独立性を明白に仮定しているが、ひとたびこの仮説が認められなくなった場合には、説得力と権威をまったく失うという点にある。ところが、日常的な議論においては、われわれは盲目的操作をするのではなく、われわれがなにをしており、用語がなにを意味するかを終始わきまえているから、必要な保留や条件

や、あとになって加えなければならない修正を『われわれの頭の片隅に』置いておくことができる。それと同じ仕方で、われわれは、偏微分はすべてゼロであると仮定している代数の数ページの『紙背に』、複雑な偏微分を置いておくことはできない。最近の『数理』経済学のあまりにも多くの部分は、それが立脚している最初の想定と同じように不正確な、単なるつくり事であって、著者はもったいぶった、役に立たない記号の迷宮の中で、ともすれば現実世界の錯綜関係と相互依存関係を見失ってしまうのである。」([6] pp. 297-298, 297)。

モデル・理論というものは不明瞭な世界を「組織化された秩序だった方法」で思考するためのものであって、盲目的適用が可能な魔法の杖ではない。ましてや理論・モデルを「動学化」して歴史過程にまで一般化して適用することも出来ないのである。

ケインズは『一般理論』形成期のケインズ・サーカスのメンバーであったジョン・ロビンソン (J. Robinson) やハロッド (R. Harrod) の過剰な「記号的方法」symbolic method に批判的であった³⁾。

ケインズの経済学方法論にもっとも近かったのはスラッファ (P. Sraffa) であった。スラッファの『商品による商品の生産』は「生存のための生産」から出発する。「ちょうどそれ自身を維持するだけのものを生産するような極めて単純な社会を考えて見よう」ということから出発した ([19] p. 3, 3)。そして新たな事態を付け加えながら徐々に複雑な形式を構築していく。商品経済の「余剰をふくむ生産」である。「経済が補填に必要な最低額以上を生産し、分配さるべき余剰が出てくると、その体系は自己矛盾をはらむことになる。」([19] p. 6, 8)。スラッファはウィトゲンシュタインと同じように複雑な現象を分析する方法として単純で特徴的なシナリオを用いようとした。スラッファとウィトゲンシュタインはともに speculative anthropology の方法を用いた ([4]

p. 115)。ウィトゲンシュタインが単純な言語で複雑な言語の意味をつなぎあわせてつくる言語ゲームを考えていたように、スラッファも単純な理論・モデルから複雑な理論・モデルへと拡張していったのである。

6. 功利主義批判

以上、Coates に従ってケインズの思想について考察したが、以下ケインズの政策思想について考察したい。

ケインズやスラッファの「サンプル」としての理論・モデルという方法はノイラートの「船」の比喻につながる。とくに「政策」ということを考えるときにノイラートの船の比喻が重要な意味を持つ。

あいまいな世界における科学やコンセンサスにとっては Neurath による比喻が最適である。つまり科学を船にたとえて、われわれがそれを改造しようとするならば、船上にとどまったままで板を一枚一枚張り替えてゆかなければならない。もし、われわれが物理的事物についての日常的な語り方をよりよく理解しようとするなら、それは、その語り方をもっとよい「理想言語」に還元することによってではない。そのようなものはそもそもないのである。可能なのは、物理的事物についての日常的語り方と、それを用いてわれわれが把握するさまざまな事柄との関係を明らかにすることによってである。われわれの船が浮かんままではいられるのも、それぞれの改造に際してその大部分には手をつけず、船を動かしたままにしておくからである。理論が連続的に変化するがゆえに、語の意味や行動を理解し続けることができる。われわれが対象について整合的に問題にしようするのは、その対象をひとまず受け入れることによって成り立つ理論体系を用いることによってである。われわれがどこで終えるかについては制限されていない場合でも、始めるということについては制限されている。ウィトゲンシュタイン的ないい回しをすれ

ば、われわれが梯子をのぼりきってはじめて梯子を外すことができるのである ([15] p. 6)。

社会的出来事は物理的事物以上に日常的語り方に規定されている。スミスはすでに社会契約論によって社会を説明しようとした立場を批判し、われわれは最初から船にのって航海している乗客のようなものであると考えた。社会契約説は航海の最中に船長が船に乗ったのは契約によっているので、その船から乗客を降ろそうとしているようなものだと批判したのである ([18] p. 107)。スミスは社会は「権威と功利の原理」によって形成されているとした。法は社会にとって決定的に重要であり、社会の「大黒柱」である。しかし法はさらに根底に sympathy (同感・共感) を必要とする。sympathyこそが社会にとって決定的に重要である。市民社会を分業と市場の発達に求めたスミスは市場の交換に sympathy の働きを見た。スミスは sympathy の原理を利己心と利己心をつなぐ原理とした。そして sympathy そのものはニュートンの自然哲学原理からの推論によった。道徳感情が自然哲学の理論と言語理論によって説明されたのである。スミスの言語論はレトリックを中心に展開されているが、このレトリックとしての言語論とニュートンの自然哲学との関係がスミスの社会理論の中心にあることは間違いない。

ノイラートの船の喩えは言語の世界についてであり、スミスの船の喩えは社会についてである。ノイラートやスミスからするとき言語や社会の根本改造は原理的に不可能であって部分的改造に満足しなければならないということである。ここに常識や commonsense や sympathy が果たす重要性がある。「社会」というものは船をドックに上げて完全に解体するように完全に解体して修理することは出来ない。社会経済理論も要素に分解しそれをモデルに組み立てて、そのモデルで現実を変革することはできないのである。「政策」によって現実を変えようとする場合、

純粋な理論・モデルを構築して、そのモデルに従って「政策」を遂行することは原理的に不可能なのである。

ケインズは「経済政策」を遂行する思想をどう考えていたのであろうか。1938年、『一般理論』発行2年後のケインズの「若き日の信条」はこれらの問題をケインズがどう考えていたかを教えてくれる。ケインズは終生ムーアとムーアの『倫理学原理』と深い係わりを持っていた。

「私は1902年のミカエル祭にケンブリッジ大学にはいったが、ムーアの『倫理学原理』(*Principia Ethica*) が第一学年の終わりに出版された。この本が今日の世代の人々に読まれているということは、聞いたためしがない。しかし、われわれにたいしてこの書物が与えた影響と、出版に前後して行われた議論とは、もちろん、他の何ものにもまして圧倒的な重要性を有していた。そしておそらく今もおそうであろう。」([9] p. 435, 568)。

ムーア自身は「ピューリタンで形式主義者」([9] p. 435, 568) で、「片足を新しい天国の敷居にかけていたが、もう一方の足はシジウィックと、ベンサム主義の功利計算と、正しい行動の一般法則の中に突っ込んでいた。」([9] p. 436, 569) 「われわれはいわばムーアの宗教を受け容れて、かれの道徳を捨てたのである。」([9] p. 438, 569) ここで「宗教」とは自分自身と絶対者とに対する人の態度のことであり、「道徳」とは外部の人間と中間的な存在とに対する人の態度のことである。ムーアの宗教は道徳を持たなかった。ムーアの宗教で重要と思われたのは心の状態だけであり、この心の状態は行動なり成果なり、あるいは結果とは全く関係がなかった。時間を超越した観照 (contemplation) と交わり (communion) との状態のことであった。その価値は「有機的統一の原理」に従って、全体としての事物の状態によって決定され、分析的に部分に分解しても無益であった。「私自身は、常に一貫して有機的統一の

原理の主張者であった。わたしには今でもそれだけが理に適ったものと思われる。」([9] p. 436-437, 569-570) こういう信念を「宗教」と呼び、それはネオ・プラトン主義に属するものであった。しかし当時は、すべて合理的で科学的なものだと考えられていた。他の部門の科学と同様に、それは経験所与（センス・データー）としてあたえられた素材に、論理と合理的分析とを適用することにすぎなかった。「ラッセルの『数学原論』(*Principles of Mathematics*) が『倫理学原理』と同じ年に出版されたが、前者は、その精神において、後者の与えた素材について論じるための方法を提供したのである。」([9] p. 438-439, 572)。

「ムーアの書物の重要な目的は、心の状態の属性としての善 (goodness) と、行動の属性としての正しさ (rightness) とを区別することにあった。かれにはまた、行為の一般的規則の正当化を扱った一節がある。正しい行為に関する彼の理論において、確率にかんする考察が演じている大きな役割が、実のところ、私が多年確率の問題の研究に余暇のすべてを費やすに至った重要な原因であった。つまり私は、ムーアの『倫理学原理』とラッセルの『数学原論』(プリンキピア・マテマティカ) と双方の影響を同時に受けて、この主題について筆を執ったのである。」([9] p. 445, 580)。

もともと確率論は偶然を伴う通常のゲームに関連した問題からはじまった。これらはすべてのゲームにおいて先験的に可能な結果は、完全につりあいのとれた有限個のばあいとして並べられる。この事実が頻度比の安定性に対する説明を生んだ。18世紀の数学者達の「同様に確からしい場合の原理」である。この原理を確率論全体の基本原理として扱ったのが Laplace であった。しかし近代の研究は公理を基礎とした数学的理論を建設しようとした立場と軌を一にした。頻度数の性質を直接的な基礎とした公理系を導入しようとする研究である。von Mises の立場であ

る。ある事象の確率を、 n を無限大としたときのその事象の頻度比の極限として定義した。Kolmogoroff や Cramér によって進められた立場は頻度比学派と同じように観察的な立場から出発するが、頻度比の極限の存在を仮定せずに、事象の確率を単にその事象と結びついた一つの数として定義した。理論の公理は頻度比について観察された性質の理想化された主張から成っている。これらの確率論は統計的規則性をしめす現象の一つの数学的理論として考えられている。確率は実際に観察された頻度比の理想的な対応物であって、ある特定の事象の確率の値は原理的には経験的な検証によらなければならない ([3] p. 115-16)。

しかしケインズや Jeffrey によってすすめられた方向は確率論を理性的な信念の度合いとする立場である。すべての命題は数値的に測定可能な確率を持っている。ある数学理論と実際に観察される事実の間の未来における一致に関して考えられる、実用上の確かさについての度合いも数値によって表すことができることになる。「現在のヨーロッパの戦争は一年以内に終わる」とか「火星には生物がいる」という主張の真実性についても、ひとつの確定した確率の値が存在することになる。「ケインズの根本思想は、我々が語る権利をもっているのは一つの事象の確率についてではなくして、ただこの事象に関してある特定の個人によって下された一つの判断の確率についてであるということである。」([2] p. 134-135)。

ムーアとラッセルの影響のもとに形成された『確率論』は論理学と倫理学の基礎になるべきものであった。しかしこの確率論と初期の経済の諸著作とに直接の関係を見ることはできない。スキデルスキー (R. Skidelsky) のケインズの伝記によってハロッドの『ケインズ伝』では知ることが出来なかったさまざまな面を知ることができるようになった。官僚としての生活はブルームズベリーの仲間生活に比べて重要性は

置かれていなかった。経済学の諸著作も人生上の価値体系にとっては決定的な意味をもたなかった。

この立場はかわる。「若き日の信条」で述べる。「われわれは、ムーアの本のこの側面には注意をはらわなかったか、あるいは、本気で取り組もうとはしなかった。われわれは尤もらしい現在の中に生きていて、行為の結果に関するゲームには手を染めていなかった。われわれはプラトンの『対話編』の世界の中にいたのであって、『法律編』はおろか、『国家編』にも到達していなかった。」（〔9〕p. 445, 580）。

ケインズがウィトゲンシュタインについて述べているところは次の文である。「われわれは文明というものが、ごく少数のひとたちの人格と意思とによって築かれた、そして巧みに納得させられ、狡猾に保たれた規則（ルール）や因習によってのみ維持される、うすっぺらで、当てにならぬ外皮であるということに気付いていなかった。われわれは伝統的な知恵だの、慣習の掣肘だのを、まったく尊重しなかった。ローレンスが認め、ルードビッヒ（ウィトゲンシュタイン）もまた、正当にも、そう言っていたように、われわれには、事物にたいしても人間に対して、尊敬の念がまったく欠けていた。生活の秩序づけのために果たした、先人たちの並々な業績（いまの私にはそのように思われる）とか、この秩序を保つために彼等の創案した精巧な枠組を、尊重することなど思いも及ばなかった。」（〔9〕p. 447-448, 583-584）。

「ムーアの第五章『行動に関する倫理学』のうち、われわれは次の部分を顧みようとしなかった。すなわち、将来の全行程を通じて、因果関係の吟味により、最も確実な、終局的な善の極大を生み出すように行動すべき責務を扱った部分……を無視したばかりでなく、また、一般的ルールに従う個人の義務を論じた部分をも無視したのである。われわれは一般的ルールに従うという、われわれに課せられた個人的責任をまった

く拒否した。われわれは個々のケースを、すべてその功罪（メリット）に応じて判断する権利を主張し、また立派に判断できる知恵と経験と自制心を備えていると主張した。」（〔9〕 p. 446, 581-582）。

この前提にある人間観は合理主義的人間観であった。「われわれ自身の人間性をも含めて、人間というものを完全に誤解していた。われわれが人間の本性に合理性を帰したために、判断ばかりか、感情の浅はかきをも招いたのである。知性の面でも、われわれはフロイト主義者以前であったというに留まらない。われわれは先人たちの有していたものを、代わりのものと取り替えないまま、失ってしまった。私はいまでも他人の感情と行動（そしてまた、疑いもなく私自身のそれ）に、非現実的な合理性を認めようとする性癖から抜け切れないでいる。」（〔9〕 p. 448, 584）。

「ムーアの『理想』に関する章には、あるカテゴリーの、価値ある感情全体がまったく脱落していたように私には思われる。人間の本性を合理的なものと思なしたことは、今にして思えば、人間性を豊にするどころか、むしろ不毛なものにしたようである。それはある強力で価値ある、感情の源泉を無視していた。自発的な、不合理な、人間本性の噴出のあるものには、われわれの図式主義とは無縁な、ある種の価値がありうる。邪悪な振舞と結び付いた感情の中にさえ、価値を有するものがありうるのである。そして、自発的な、爆発的な、邪悪ですらある衝動から生じる価値に加えて、われわれの知っている対象のほかにも、さらに価値ある観照と交わりとの対象が多数存在する。すなわち、共同社会の間の生活の秩序の範型（パターン）、それらのものが呼び起こす感情、などにかかわりを持つ対象がそれである。……われわれ個人に特有の個人主義はあまりにも行きすぎであった。」（〔9〕 p. 448-449, 584-585）。

ここにわれわれは「自由放任の終焉」の基本的思想をみることが出来

る。「人間の本性が合理的なものだという見解は、1903年には、その背景に非常に長い歴史を持っていた。この考えは、あたかも一般的善を目指したカントないしベンサム¹の普遍的倫理学に見られるように、利己心 (self-interest)——いわゆる合理的な利己心——の倫理学の根底をなしていた。そして、利己心が合理的なものであったからこそ、利己主義の体系と利他主義の体系とが、実際には同じ結論を生むものとされたのである。」 ([9] p. 447, 583)。

しかしムーア主義の貢献がある。ベンサム主義からの脱却である。「われわれだけが、ベンサム主義の伝統から抜け出すことのできた者に属していた。……ベンサム主義の伝統から抜け出したことが、われわれにとってなぜそのように大きな利点であったのか、……今日私は、ベンサム主義の伝統こそ、近代文明の内部をむしばみ、その現在の道徳的荒廃に対して責めを負うべき蛆虫である、と考えるものである。われわれはいつもキリスト教徒を敵と見なしていた。彼等は伝統と因襲とベテンとを代表するように見えたからである。ところが、その実、世間一般の理想の本質を破壊しつつあったのは、経済的基準の過大評価に基づくベンサム主義の功利主義であった。そのうえ、マルクス主義として知られる、ベンサム主義の極端な帰結 (reductio ad absurdum) の決定版から、われわれの仲間全体を守るうえに役だったのは、われわれの哲学の至高の個人主義に加えるに、……ベンサム主義からの脱却であった。」 ([9] p. 445-446, 訳 p. 580-581)。

ケインズは『一般理論』発表後、『一般理論』をめぐる論争のなかで自分自身の『一般理論』について述べたが、そこでもベンサム主義に対する批判が中心を成している。リカード (D. Ricardo) やマーシャル、ピグーやエッジワース (Edgewars) に対する批判もそのベンサム主義的前提からなされている。これらの理論は「いまだに雇用されている要

素の量は与えられており、かつその他の関係ある諸事情も多かれ少なかれ既知である体系を取り扱っている。このことは必ずしも変化という事を排除した体系をとりあつかっている事を意味しない。いな、期待外れをすらも排除しているとは言えない。しかし、一定の時においては常に事実と期待は一定かつ予測しうる形で与えられていると仮定されていた。そして、危険——これにたいしてはあまり注意が払われていなかったことは認められているが——は正確な保険統計学的計算の可能なものと想定されている。確率の計算法——それ自身の論述は背後にかくされてはいるが——は「確実性」(certainty)を計算しうるのと同じ状態にまで「不確実性」(uncertainty)を減ずることができるかのごとく想定されている。このことはちょうどベンサム哲学において一般的な倫理的行為に影響を及ぼすものと仮定されている苦痛と快楽、利益と不利益が計算される場合と同じようなものである。」([5] p. 281)。

「正統派理論は、ひとびとが現実を持っているものとはまったく異なった種類の『未来に関する知識』を人々が持っていることを仮定している。この誤った実感はベンサム哲学の計算法の線に沿ったものである。」([5] p. 292)。

ケインズの『一般理論』はベンサム主義的功利主義とベンサム主義的科学方法論を克服するための知的努力の結晶であったといえよう。

そしてケインズの経済政策の中心的役割を果たす公共政策における数量調整機構も「乗数」効果が「浮動しやすい」「投資率」と不可分の関係にあるというのがケインズの考えであった。([5] p. 291)。

7. 結論

今日、ケインズ主義の要と考えられている公共投資政策の効果のみならず、ケインズ主義がもたらした「大きな政府」「うるさい政府」、どう

しようもない官僚主義が批判にさらされている。そしてその理論的根拠とされて来たのが市場の価格調整機構を媒介しない「乗数」「加速度」効果という数量調整機構への信頼であった。いまこの数量調整機構の果たす役割が問われている。そしてふたたび価格調整機構の重要性が決定的に評価され、ハイエク（Hayek）主義が高い評価を得ている。ケインズ主義とハイエク主義が対極にあるように理解されている。しかしケインズ自身はそう考えていなかった。ケインズは「一般理論の導く社会哲学に関する結論的覚書」で次のように述べた。

「古典派理論の欠けているところを補充する結果は、『マンチェスター学派の体系』を放棄することではなく、経済諸力の自由な作用によって生産の全潜在力を実現するためには、どのような性質の環境が必要とされるかを指示することである。……もちろん、完全雇用を確保するために必要な中央統制は、政府の伝統的な機能の著しい拡大をとまなうであろう。……しかし、なお個人の創意と責任が働く広い分野が残されるであろう。この分野の中では個人主義の伝統的な利益が依然として妥当するであろう。」（〔6〕p. 379-380, 382）。

「消費性向と投資誘引とを相互に調整する仕事にとまなう政府機構の拡張は、十九世紀の評論家や現代のアメリカの銀行家にとっては個人主義に対する恐るべき侵害のように見えるかもしれないが、私は逆に、それは現在の経済様式の全面的な崩壊を回避する唯一の実行可能な手段であると同時に、個人の創意を効果的に機能させるための条件であるとして擁護したい。」（〔6〕p. 380, 383）。

ケインズは『一般理論』の「定義と基礎概念」を形成する中で、ハイエクの考えに疑問を呈した。

「純所得は、権威者が異なればその解釈も異なるというような曖昧な基準に基礎をおいているために、たしかに、完全に明解なものではな

い。たとえば、ハイエク教授は、資本財を所有する個人は、その所有から得る所得を不変に維持することを意図し、そのため、どんな理由からであっても彼の投資所得が低減する傾向がある場合には、それを埋め合わせるに十分なだけ取っておくまでは、彼の所得を消費のために支出しないであろうと示唆した。私は果たしてこのような個人が存在するかどうか疑問であると思う。」([6] p. 60, 60)。

ケインズとハイエクは個人の創意を積極的に生かす市場経済という理念では違いはなかった。違いは現実理解にあった。ハイエク的な「資本財を所有する個人」が実際に存在するのかという疑問であった。『一般理論』では巨大化する固定資本が「期待」の変化によって激しく資本効率を変化させる事態を前提にして論理が組み立てられた。この変化を市場が吸収し得ないというのがケインズの考えであった。市場の「失敗」である。しかしケインズは、市場経済の否定ではなく市場経済の限界という事実に注目した。この現実のなかでできるだけ現実を正しく理解できる地図を作成するということが重視された。諸概念の定義もこのような判断からなされた。「所得」の定義は、日常の用法にできるだけ密接に合致することを意図したものである。」([6] p. 60) そしてこの方法の有効性は「この所得の定義がもっとも serviceable であり, misunderstanding に導くことがないからである。」([11] p. 416) と考えた。

このケインズの理論はその後一方でケインズがもっとも否定的であった際限のない数理的な一般化という方向と、「政策」という名の魔術化をもたらした。ケインズに対する批判者もケインズ主義者もともに、『一般理論』がどのような思想で形成されたかを理解しなかった。前期ウィトゲンシュタイン的世界から後期ウィトゲンシュタイン的世界理解への変更が根本的な科学的な世界理解の変更を求めたが、このことの意味を経済学者達は考えて見ようとしなかった。

そこで、今もとめられているのは、市場の限界を包摂する「制度」の仕組みについてあらためて考察し直すことであり、そのために「言語ゲーム」そのものの探究から始めなければならなくなっている。

注

- 1) ウィトゲンシュタインはスラッファについてつぎのように述べた。

「わたくしは、自分の最初の著書（『論理哲学論考』）を再読し、その思想を解説しなくてはならない機会に見舞われた。そのとき、突然、あの旧著の思想と新しい思想とを一緒に刊行すべきではないか、あたらしい思想は、自分の古い思想との対比によってのみ、またその背景の下でのみ、正当な照明がつけられるのではないか、と思ったのである。

すなわち、十六年前ふたたび哲学に従事するようになって以来、わたくしは、自分が最初の著書の中で書き記しておいたことのうちに、重大な誤りのあることを認めなくてはならなくなった。そうした誤謬を見ぬくのに——わたくし自身ほとんど評価できないほど——役だったのは、フランク・ラムゼイがわたくしの考えに対して下した批判であった。……かれの……批判にもまして、わたくしは、この大学の教師である P. スラッファ氏が、長年の間絶え間なくわたくしの思想についておこなってくれた批判のおかげを蒙っている。こうした激励のおかげで、この手稿にあらわれる思想のうち最も実りゆたかな部分が生まれたのである。」（[23] p. 10-11）

- 2) スラッファは1925年のイタリア語の論文「生産費用と生産量との関係について」でマーシャルの価値論、すなわち需要・供給均衡理論を批判し、ケンブリッジ学派の経済学者達に深刻な影響をあたえた。（菱山泉『ケネーからスラッファへ』名古屋大学出版会、1990年、第二章参照。）
- 3) 1932年、ジョン・ロビンソンとケインズの間で書簡がかわされたが、ケインズはロビンソンに次のようなことを述べた。「あなたが自分の議論全体を展開する過程で使用している用語を私が使用している言語（language）と比較したとき、貴方の言語になじみがないと言わねばなりません。一般的に私の信念を申し上げるなら、ある特殊な問題を操作する可能性というものから離れると、貴方のやり方というのは、より困難で、扱いにくいものです。今のところ、私のいま使用している分析の武器が中途半端なものであったとしても、それを廃棄して貴方のやり方に従う気持ちになりませんし、自分にそう言い聞かせる気にもなりません。もちろん貴方が自分のやり方で進んでいって悪いということでないことはもちろんですが。」（[10] pp. 377-78）。

1938年、エコノミック・ジャーナルの編集者としてケインズはハロッドの『動学理論』をめぐって何回も書簡をおくった。

ハロッドに次のような書簡をおくった。

「あなたの改定された版を有難う。わたしは適当な時に印刷に送ろうと思い

ます。私が以前言ったように、極めて興味深い考えと課題をもっています。しかし、あらためて読み直してみると、読者の立場にたった見解として、より強く感じていることは、あなたは読者が価値を認めるものに十分な印象を与えるように自分の考えを提示しているかどうか、はっきりしませんし、それを必ずしも正当化することに成功しているとも思えません。私はその説明が不十分であると思いますし、あなたの記号使用 (symbolism) のやり方で私は実際に仕事をするのが出来ないということを知りました。その記号使用はあなたの量 (quantities) の次元についての見通しを失わせるし、操作するのに大変困難である工夫であるように思われます。」 ([11] p. 339)。

ハロッドとの書簡にはティンバーゲン (Tinbergen) の計量経済学的手法に対して厳しい批判がくり返されている。

「われわれは目的についてほとんど違いがないと思います。あなたの論文について同意出来ないことはほとんどありません。まったく反対に、例えば、乗数 (multiplier) の大きさ (the order of magnitude) を統計的に研究することは、極めて重要な事柄です。そして、理論的に可能なそれぞれ違った事実を相対的な重要度に応じて評価するようにするということは極めて重要です。

私がティンバーゲンに反対するのはこれとはちがいます。化学や物理学および他の自然科学においては、実験の対象はさまざまな量 (quantities) の実際の価値や方程式または定式のなかで現れる要素によって満たされます。そしてその仕事は一度にしかも一挙になされます。経済学においてはそうは行きません。モデルを数量的定式化にすることは思考の手段としての有用性を破壊することです。ティンバーゲンは特殊なケースにおける変量を解いて、いくつかの特殊なケースの平均で仕事をし、そのようにして得られた数量的定式化で一般的な妥当性を得ようとしている。しかし、事実は数字 (figure) をみただけでは、次の時に当てはめることは出来ないということははっきりしている。その道具立てでは価値を高めるといふより、その価値を破壊させてしまった。……

モデルによる思考というやり方は、あまり一般化していないために、実行するのに困難であるということは強調しておかなければならない。物理化学とのえせ類似化 (pseudo-analogy) は経済学者として必要な資格を要するものとも重要な心の habit ともっとも対立方向へ導くのである。」 ([11] pp. 299-300)。

ティンバーゲンの方法はケインズにとって the mazes of arithmetic (迷路) であり the mazes of logic であった。 ([11] p. 307) さらにそれは black magic であった。 ([11] p. 320)。

参考文献

- [1] Bateman, B. W., *Keynes's Uncertain Revolution*, The University of

- Michigan Press, 1996.
- [2] Borel, E., *Valeur pratique et philosophie des probabilités*, (三田博雄訳, 『蓋然性の哲学』創元社, 昭和17年)
 - [3] Cramér, H., *Mathematical Methods*, Princeton University Press, 1946. (池田貞雄監訳, 『統計学の数学的方法2』東京図書株式会社, 1973.)
 - [4] Coates, J., *The Claims of Common Sense—Moore, Wittgenstein, Keynes and the Social Sciences—*, Cambridge University Press, 1996.
 - [5] Harris, S. E., *The New Economics—Keynes' Influence on Theory and Public Policy*, Alfred A. Knopf, Inc., New York, 1948. (日本銀行調査局訳, 『新しい経済学』東洋経済新報社, 昭和24年)
 - [6] Keynes, J. M., *The General Theory of Employment, Interest and Money, The Collected Writings of John Maynard Keynes, Volume VII. The Macmillan Press LTD.* 1971. (塩野谷裕一, 『雇用・利子および貨幣の一般理論』東洋経済新報社, 昭和58年)
 - [7] ———, *Treatise on Probability, The Collected Writings, VIII*, 1973.
 - [8] ———, *Essays in Persuasion, The Collected Writings, Volume IX*, 1972. (宮崎義一訳, 『説得論集』東洋経済新報社, 昭和56年)
 - [9] ———, *Essays in Biography, The Collected Writings, Volume X*, 1972. (大野忠男訳, 『人物評伝』東洋経済新報社, 昭和55年)
 - [10] ———, *General Theory and After Part I Preparation, The Collected Writings, Volume XIII*, 1973.
 - [11] ———, *General Theory and After Part II Defence and Development, The Collected Writings, XIV*.
 - [12] Kolmogoroff, A. N., *Grundbegriffe der Wahrscheinlichkeitsrechnung*, Berlin 1933. (根本伸司・一条洋訳, 『確率論の基礎概念』1972.)
 - [13] Moore, G. E., *Principia Ethica*, 1903. (深谷昭三訳, 『倫理学原理』三和書房, 1982.)
 - [14] ———, *Ethics*, Home University Library, Thornton Butterworth, 1912. (深谷昭三訳, 『倫理学』法政大学出版局, 1977.)
 - [15] Quine, W. V. O., *Word and Object*, The M. I. T. Press, 1960. (大出兆・宮館恵訳, 『ことばと対象』勁草書房, 1991.)
 - [16] Rymes, T. K., *Keyne's Lectures, 1932-35—Notes of a Representative Student—*, The Macmillan Press Ltd. 1989.
 - [17] Skidelsky, R., *John Maynard Keynes—Hopes Betrayed 1883-1920*, Macmillan, London, 1983. (宮崎義一訳, 『ジョン・メイナード・ケインズ』I. II. 東洋経済新報社, 昭和62年, 1992.)
 - [18] Smith, A., *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms*, Divided in the University of Glasgow by Adam Smith. (高島善哉・水田洋訳, 『格拉斯ゴウ大学講義』日本評論社, 昭和22年.)

- [19] Sraffa, P., *Production of Commodities by Means of Commodities*, Cambridge University Press, 1960. (菱山泉・山下博訳,『商品による商品の生産』有斐閣, 昭和53年)
- [20] Whitehead, A. N. & B. Russell., *Principia Mathematica*, Cambridge, 1st ed. vol. 1, 1910, pp. v-viii, 1-84. (岡本賢吾他訳,『プリンキピア マテマティカ序論』哲学書房, 1988.)
- [21] Wittgenstein, L., *Prototractatus An early version of Tractatus Logico-Philosophicus*, London Routledge & Kegan Paul, 1971. (奥雅博訳,『論理哲学論考』大修館, 1975.)
- [22] ———, *Bemerkungen über die Grundlagen der Mathematik*, Basil Blackwell, Oxford, 1956. (中村秀吉訳,『数学の基礎』大修館, 1976.)
- [23] ———, *Philosophische Untersuchungen*, Basil Blackwell, 1953. (藤本隆志訳,『哲学探求』大修館, 1976.)
- [24] ———, *Über Gewissheit*, Basil Blackwell, 1969. (黒田亘訳,『確実性の問題』, 大修館, 1975.)
- [25] 東條隆進,「ケインズ革命と経済政策」『産業社会と経済政策』第1章, 北樹出版, 昭和53年.